白山人類学　12号　2009年3月

済州スニム（僧侶）のトランスナショナリティ
——大阪市生野区の事例を中心に——

宮　下　良　子*

The *Jeju Sunim* or the Korean Monks in Japan: A Case Study on their Transnationality in Ikuno, Osaka

MIYASHITA Ryoko*

People known as "Korean newcomers" are the schoolchildren, the college students, and workers who have joined immigrant societies in Japan since 1980s. They are transnational people who do not possess the same historical background that their predecessors have had. In the present situation where there are few successors to the ageing priests called *sunim* among the society, it is the newcomers who are taking over their positions. A *sunim* whom I met in January 2003 was one of such newcomers.

Both Koreans who have long settled down in Japanese society and the newcomers that have just come to live are "immigrants". The term "immigrant" was often associated with painful images of those who have difficulty in assimilating to the country of the destination. However, such an image does not remain the same today. The word "migrant" used to imply a temporary sojourner; whether they would settle down or return to their own country was considered quite uncertain. Nowadays "migrants" or "immigrants" can no longer be categorized within such recognition; they are developing their network, activities, life patterns, and thoughts, both in their own country and the host country, and are constructing social fields that exceed geographic, cultural and political boundaries.

This paper focuses on the life-world of a *sunim* Korean newcomer who "comes and goes" between Jeju and Osaka, thus crossing the national boundary. It aims to examine the changing transnational situations in two countries from the religious perspective, and clarify the actual conditions in detail.

キーワード：済州スニム，ワッタガッタ，ニューカマー，四・三事件，トランスナショナル
Keywords: *Jeju Sunim*, Comes and Goes, Newcomer, Jeju Massacre, Transnational

* 大阪市立大学；都市研究プラザ G-COE 特別研究員；Urban Research Plaza Global COE Program Research Fellow, Osaka City University, 3-3-138, Sugimoto, Sumiyoshi, Osaka, 558-8585/ miyashita@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

はじめに

コリアン・ニューカマーと称される人々は，主に1980年ごろから日本に入国してきた就学生，留学生，就労者[1]であり，定住コリアンたちがたどってきたような時間的，歴史的背景を持たないトランスナショナルな人々である。本事例のスニム[2]は，1988年に渡日したニューカマーであり，現在は在日コリアンたちが多く居住している大阪市生野区鶴橋に拠点を置いている。

筆者は，在日コリアン一世の宗教的職能者たちが高齢化し，それを継承する者がいないという隙間に，これらのニューカマーの宗教的職能者が入り込んでいるという実態を明らかにしてきた［宮下 2005: 55-85］が，本事例のスニムは，その過程で2003年1月に出会ったインフォーマントである。特筆すべきことは，スニムの信者250世帯のうち，在日以外の日本人が三分の一の割合だということである。コリアンのシャーマン[3]の巫業がある時期以降、コリアンのクライアントから日本人クライアントへと移行していった事例については，すでに拙稿［宮下 2005: 55-85; 2006: 213-231］で述べており，それぞれの宗教的職能や時代背景などの差異はあるにしても，本事例のスニムの信者数に占める日本人の割合の多さは他に例を見ない。例えば，東京の新大久保，新小岩，三河島で調査したニューカマーの宗教的職能者，主にシャーマンたちや，生野区鶴橋のシャーマンたちは，実際の巫業の場における言語が日本語でない場合，あるいは日本語習得度が低い場合は日本人クライアントの獲得率が低くなるし，在日でも韓国語が理解できない二世，三世がほとんどなのでますます巫業の依頼が少ないというのが現状である。本事例のスニムは，故郷の済州島に生活の拠点を置きながら，大阪との往復（ワッタガッタ）[4]を20年間続けているが，スニムの生活世界を通して宗教的側面から，時代とともに変化した日・韓のトランスナショナルな状況を分析することが本研究の目的である。また，その生

---

1) 筆者がこれまで聞き取りをしたコリアン・ニューカマーたちが日本に入国する際に取得する主なビザは，①特定ビザ…日本人の配偶者（在留期間1年～3年），②一般ビザ…留学生の配偶者（在留期間3ヵ月～3年），③短期滞在（在留期間15日または30日）のどれかのカテゴリーに入る。①に関しては，入国または結婚して3年以上で，経済的安定性、子どもの出産からはかる安定性等の条件を満たせば永住資格を取りやすく、②に関しては、留学生の在留期間に付随するが，留学生ビザから資格変更審査を経て就労ビザになった場合には，就労期間が10年以上で①と同様，条件を満たせば永住資格が取れる［宮下 2005: 74-75］。

2) コリアン男僧の尊称で、「仏に経をあげ，あるいは霊を読経で供養する役目をもつことから，信者や巫女からは『知識・学問のある人』といわれている」［谷 1985: 248］。

3) 超自然的存在（霊，精霊，死霊など）と直接接触・交流し，この過程で予言，託宣，卜占，治病行為などをはたす人物［佐々木 1980: 41］。

4) ワッタガッタ（韓国語）＝「往来」という意味だが，つかこうへいの「娘に語る祖国」では，「杯のご返杯」という意味もあり，「お前を信じた，これからは友だ」という類の意思表示のことを指している［つか 1990: 113］。

活実態を分析する方法論として，先の筆者の論考［宮下 2000: 11-24］で援用したトランスナショナリズム［Basch et al. 1992］を援用する。研究の方法は，大阪市生野区鶴橋のＳ寺において，主にスニムと信者たちへのインタビューと儀礼の参与観察，期間は 2003 年 1 月から 2008 年現在に至り，今なお継続中である。

Ⅰ コリアン・ニューカマーの先行研究

現在の日本でコリアンたちが集住している地域は，大阪市生野区，東京都荒川区，川崎市川崎区などである。以下の人口数は，国籍や民族の境界があいまいで，定住コリアンではないニューカマーの数も含まれ，その内訳は厳密ではないが，1999 年の各地方自治体による統計では，大阪市生野区は，全人口約 14 万 5,000 人中約 3 万 6,000 人，東京都荒川区は，全人口約 17 万人中約 6,600 人，川崎市は，全人口約 120 万人中約 8,900 人が韓国・朝鮮籍であり，川崎区は 460 人である［原尻 2000: 37-39］。この中でも，特に大阪市生野区と東京都荒川区は主に，済州島出身者が多く集住するという特徴があった。このような背景については次章で詳しく述べるが，本事例のスニムの出身も済州島である。原尻は，「済州島人の基本的観念を考える際，移民，移住，出稼ぎなど，定住者がある所からある所に移る概念は使えないといえる。ある個人は自己の出身村のネットワークを利用しながら，その時その時の様々な状況で生活の場を動かしていくからである」［原尻 1994: 45］と，済州島人の動態を分析しているが，それはニューカマー以前の済州島人の日本への流入経緯が要因としてあるのではないかと筆者は考える。その経緯を図式化したものが，図 1 である。

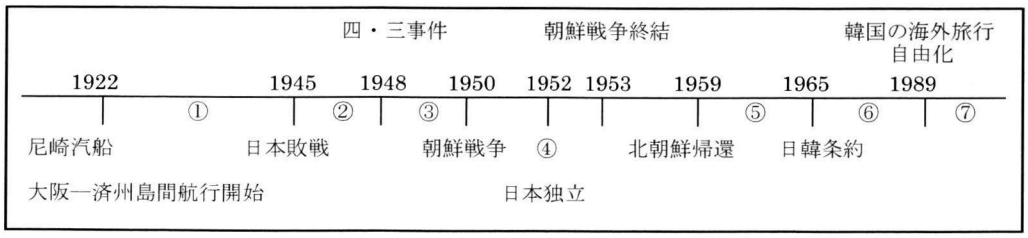

図 1　済州島出身者の日本への移動年表

出典：原尻［1994: 45, 2000: 40］から再引用、作表。

確かに，戦前の尼崎汽船の阪済間往復航路開始，1948 年の四・三事件，1950 年の朝鮮戦争による済州島人の日本への流入数は多く，韓国本土のコリアンと比較すると，次章の表 2 から見てもわかるように，かなり増加している。同時に同郷人のネットワークを利用して，連鎖移

民である縁者は一定地域に集住する特徴もある。しかし，本稿のスニムは前述したように1988年に渡日したニューカマーで，図1からすると，⑦のカテゴリーに入り，「これからも日本に住むかどうか分からない人々である」［原尻 2000: 142］。筆者は，この定住するかどうかわからない，一見不安定な動態こそ，日本社会の中で生きている，いわゆる「移民」であると考える。従来，「移民」という言葉は、移住先に同化しようという困難でつらいイメージを抱かせたが，現在の移民のイメージというのは必ずしもそうではない。また，「移住者」というのは一時的な滞在を想定させ，最終的に本国に帰るかさらに移住を続けるかという認識であったのが，今日では「移民」も「移住者」もそのような認識の範疇ではとどまらなくなってきた。彼らは本国と受け入れ国にまたがるネットワーク・活動・生活パターン・思想を展開しているのである。つまり，今日では多くの移民が地理的・文化的・政治的境界を超えた社会フィールドを構築していることから，この移住プロセスは「トランスナショナリズム」と定義される。「トランスナショナリズム」の現象はよくコミュニケーションや輸送の技術における変化の成果として，あるいは，航空旅行や遠距離通信が利用可能になったということから生じてきたことと考えられていて，境界を越えた複合的関係―家族的・経済的・社会的・組織的・宗教的・政治的―を展開し維持する移民を「トランスマイグラント」と呼ぶ。「トランスナショナリズム」の本質的要素は，その「トランスマイグラント」が本国と移住国の両方で維持している関わり合いの複合性なのであり，彼らは2つ以上の国家に同時接続する関係性のネットワークに入り込んで活動し，決定し，主体性やアイデンティティを発達させるのである［宮下 2000: 13-14］。この「トランスナショナリズム」の本質的要素である「トランスマイグラント」に在日コリアンを当てはめて考察してみると，オールドカマー（定住コリアン）の場合は，より複雑な歴史的経過を辿った人が含まれ，本国に帰る故郷がないという覚悟のもとで日本に定住する人が多いが，ニューカマーの場合は，まさしく上記の「トランスマイグラント」としての定義に当てはまる。つまり，本事例のスニムも済州島と大阪に同時接続する関係性のネットワークに入り込んで活動し，その中で自分の主体性やアイデンティティを発達させているのである。

コリアン・ニューカマーは，不法滞在などの数を含めると，その人口数が不透明であり，定住コリアンとしての時間的経緯や一定地域に居住するという特質を持たない。そのようなニューカマーが関与して形成されるコリアタウンの形態を「(1) もともと定住コリアンの集住地がニューカマー（コリアン中心だが他の外国人も含む）のそれに変ったケース，(2) 定住コリアンの集住地にニューカマーが増え，雑居的なタウンになっているケース，(3) コリアンを中心として他の外国人労働者の新しいタウンがつくられるケース」［原尻 2000: 140］と分類し，マクロな動態について言及した論考はあるが，個人の生活世界に焦点を当てた論考はほとんどない。本稿は，先述したように国境を越えて韓国と日本を「行ったり来たり」している一人の

コリアン・ニューカマーの生活世界を宗教的側面から分析し，その実態を明らかにすることで，これまでのコリアン・ニューカマーの先行研究と一線を画する。

II 済　州　島

1　済州島の背景

本事例のスニムは，1954年8月生まれの韓国済州市梨湖里出身である。済州島は朝鮮半島の南西に位置し，木浦より142キロメートル離れている。8人きょうだい（5男3女）の末っ子で，父は1902年生まれ，母は1911年生まれである。父は20歳ごろから29歳ぐらいの約10年間，大阪の森ノ宮（現大阪市中央区森の宮）で船乗り（商船）をしていたが，病気で船を降り，韓国に戻って日本で得た資金で土地や畑を買う。29歳で20歳の母と結婚し，すぐに夫婦で大阪と済州島を行き来していた定期連絡船，君が代丸で大阪に渡る（母の二人の妹も後に渡日）。その背景には，日本に来ると生活が楽になる，または，お金もうけができるという通念がその当時の韓国人にはあったと思われる。そして，日本にいた親戚と森ノ宮で製薬工場を作るがうまくいかず，母だけが下の妹を連れて済州島に戻り，1931年に長男を産む。その2年後には，父も済州島に戻る。

当時の韓国，特に済州島の日本への渡航を促進した要因は，杉原の『越境する民』［杉原1998］を中心にまとめると、第一として，植民地支配による生活の経済的不安があげられる。まず，漁業においては，1880年代以降，日本の潜水器漁法により漁場が荒らされ，アワビ，サザエ，ナマコなどの海産物が減少した。また，機械織による安価な綿製品が日本から流入し，手紡ぎの綿織物が打撃を受けた。特に農業に至っては，「1910年代の植民地支配に伴う土地調査事業による土地耕作権の収奪は著しかった」［文2008: 35］。表1からも分かるように，小作農家の渡航率の高さは際立っている。

第二は，商工業都市である大阪の低賃金労働力需要が拡大したことである。その中でも，朝鮮人労働者を2,000人近く動員した1922年当時の東成区の平野川改修工事によって，川の周辺には朝鮮人部落が形成され「工業地帯の素地もつくられ」［伊地知2000: 86］た。東成区には中小工場が増加し，「綿織物工場・石鹸工場は工場数・生産額とも大阪市の第一位を占め，ゴム工場は工場数は大阪市の第一位，生産額は第二位を占め」［伊地知2000: 88］た。特にヘップサンダルは「最盛期には1日，12万足，日本全体の生産高の60パーセント」［原尻1994: 46］が猪飼野で生産された。零細工場も多く，そのなかで済州島の人々は職工として大阪へと渡航していったのである。

表1　済州島から日本への渡航家庭調査（1934年4月末現在）

	全家族渡航戸数	50歳以上20歳未満残留	女子および20歳未満残留	40歳以下20歳以上2名あて残留	全家族半ば以上20～40歳残留	渡航戸数	非渡航戸数	計
農　業								
地　主	14	111	36	191	99	451	690	1,141
自　作	102	1,110	1,362	2,587	2,573	7,999	6,536	14,536
自小作	578	1,694	1,858	2,670	2,430	9,230	4,733	13,963
小　作	954	1,929	1,331	1,909	1,745	7,868	3,249	10,117
漁　業	155	472	351	427	450	1,862	1,709	3,568
自由労働	200	223	194	289	188	1,094	364	1,458
商　業	192	95	95	116	168	666	497	1,163
工　業	32	58	66	66	29	251	59	310
無　職	421	284	193	122	56	1,076	134	1,210
計	2,648	5,983	5,487	8,642	7,738	30,498	16,968	47,466

出典：杉原［1998: 89］より筆者修正。

原典処：『桝田一二地理学論文集』（弘詢社，1976）

2　君が代丸

前節でスニムの父親が，1922年から済州島―大阪間を行き来していたのは，「君が代丸」であるということはすでに述べたが，ほとんどの資料によると，大阪済州島航路「君が代丸」の就航は1923年から開始されたとある。この点については，杉原も「…1922年以来不定期で『君が代丸』が大阪済州島に就航していたことが推定されるところである…なお舛田一二も尼崎汽船部の航路開設を1922年としている」［杉原1998: 117］と述べている。その後，「朝鮮郵船や鹿児島郵船，さらには朝鮮人独自の東亜通行組合などが参入して，激しい運賃値下げ競争をくりひろげ，33年前後のピーク時には年に3万人近い済州島人を大阪へと運んだ」［文2008: 36］ということである（表2を参考）。

表2では，1924年の日本に在留する済州島出身者が前年の約2倍に増加しているが，その一因として，在日朝鮮人女性の中に占める済州島出身の女性の比重が大きいということがある［杉原 1998: 83］。彼女たちの中でも26歳から30歳がもっとも多く，続いて，21歳から25歳，15歳以下である。これは，働き手としての一定の年齢層と，子どもを伴っているであろう既婚女性の比率を示しており，「家族ぐるみの定着化傾向の進展」と分析されている［杉原1998: 85］。つまり，「移民」のホスト国における定着化を促進する要因として，子どもの存在は大きいということの実証でもある［宮下2005: 79］。

表2 在日済州島出身者数、在日朝鮮人人口、済州島における朝鮮人人口の推移

	日本に在留する済州島出身者			在日朝鮮人			済州島内在住の朝鮮人人口		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1922	–	–	–	50,874	8,870	59,744	96,953	101,046	197,999
1923	[6,600]	[3,600]	10,381	67,715	12,300	80,015	104,044	104,974	209,060
1924	[14,300]	[5,300]	19,552	100,429	17,763	118,192	106,429	108,155	214,584
1925	19,381	6,395	25,782	107,494	22,376	129,870	95,280	109,034	204,314
1926	21,096	7,044	28,144	116,415	27,383	143,798	101,033	108,808	209,841
1927	23,560	6,941	30,505	135,714	35,561	171,275	100,840	109,688	210,508
1928	25,205	7,355	32,564	184,300	53,804	238,104	98,956	105,464	204,420
1929	27,398	7,924	35,322	205,165	70,041	275,206	92,847	101,170	194,017
1930	24,252	7,534	31,786	215,633	82,458	298,091	92,938	105,366	198,304
1931	23,735	9,288	33,023	220,759	90,488	311,247	91,410	102,200	193,610
1932	25,048	11,077	36,125	265,498	125,045	390,543	93,892	105,377	199,269
1933	28,415	18,856	47,271	305,999	150,218	456,217	87,868	100,641	188,509
1934	29,360	20,685	50,045	348,081	189,614	537,695	87,557	100,853	188,410
1935	27,701	20,667	48,368	390,284	235,678	625,678	91,412	106,131	197,543
1936	26,403	20,060	46,463	426,551	263,950	690,501	91,308	103,970	195,278

出典：杉原［1998: 84］掲載の表 II-3
原典処：左欄、『桝田一二地理学論文集』（弘詢社，1976）。中欄、田村紀之「内務省警保局調査による朝鮮人人口（1）」『経済と経済学』46 号（1981）。右欄、済州島庁編『済州島勢要覧』（1937）。

3 四・三事件

スニムの両親が済州島に戻ったその後，終戦を経て，四・三事件が起きた。1948 年 4 月 3 日米軍政下の南朝鮮単独政権樹立のための代議員選挙に反対する済州島民衆の蜂起に対して，軍・警察・右翼青年団体は徹底的な武力弾圧に乗り出し，山間の村々は焼き尽くされ，たくさんの虐殺事件が引き起こされた。1954 年 9 月 21 日までに 3 万人による蜂起が完全に鎮圧され，1957 年までには 8 万人の島民が殺されたとも推測される。当時，海から 500 メートルくらいの所に住んでいたスニムの家族は，山に避難した。山間部は共産党，海岸沿いは警察が拠点を置いており，当時，ポクト[5]と呼ばれていた共産党たちは，山にこもって島民に思想教育をしていた。半年くらいして山から下りてくるとマダン[6]には草が生い茂っており，それを皆で刈り，また山に隠れるといった生活を強いられていたということだ。そして，スニムの兄である長男が当時 16,7 歳で，村を警備していたらしい。また，この四・三事件の影響で，家族・親戚のい

5) 韓国語のポクトは日本語では「暴徒」という意味である。
6) マダン＝「広場」の意味。

る日本へと渡航する人が増えたという。日本の植民地化や四・三事件を経たうえに，1950年にまたもや朝鮮戦争があり，さらなる島民の犠牲者が増えたことは想像にかたくない。

1954年，スニムの2番目の兄が16歳ぐらいのときに，釜山から連絡船で大阪に渡航する。父の兄の息子（いとこ）を頼り、生野区に住む。その後結婚し，父が還暦の1963年に一時済州島に戻る。

III 大　阪

1970年にスニムの父が68歳で亡くなり，4年後の1974年，スニムが済州情報大学2年を終えたころ軍隊に3年間入隊し，その後復学，卒業してから水産組合に26歳から33歳の7年間勤務する。1981年27歳のときに24歳の妻と結婚する。長女が1982年，長男が1980年に生まれる[7]。

水産組合を辞めた1年後の1988年，スニムの2番目の兄の住む大阪に渡航する。その背景には1985年から50歳以上の外国旅行の自由化，1988年ソウルオリンピック後はその年齢制限もなくなったということが影響している[8]ということだが，これは当時の韓国の経済が不安定であったということと，日本の1986年から1991年のバブル景気というのがその要因であると思われる。

原尻は，「済州島出身者は，出身のムラごとの親睦会を組織しており，それは済州島のムラおよびムラビトと関係している。…このネットワークは現在にいたるまで維持されており，済州島出身者が日本の『ムラ』と済州島のムラを往来するときのバックボーンでありつづけた」［原尻 2000: 42］とし，それが大阪の生野区と東京の荒川区であると述べている。また，職種もムラの人同士（連鎖移民）では同じ職業になる傾向が強く，「1980年代のバブル経済期から増えていった韓国本国からの新来者が，生野区や荒川区に同胞がいて，しかも韓国語が通じることから，職をそこで求めたりあるいは居住したりする」［原尻 2000: 44］と済州島出身者の

7) 2008年現在，26歳の長女はソウルでファッション関係，芸術関係のファッションコーディネーター，24歳の長男は忠清南道の総合病院で作業療法士をしている。

8) 1965年，日韓条約締結以降，密航ではなく短期滞在ビザで日本に入国し，韓国と日本を行き来するシャーマンたちが徐々に増加していった。それには，全斗煥が光州事件を弾圧した翌年の1981年に外貨持ち出しが緩和され［宮下 2000: 17］，1989年には海外旅行の自由化が実施される等の韓国政府の政策が，日本への入国者総数を増加させたという背景があると考えられる。2003年3月18日に行った法務省，入国管理局への電話インタビューによると，韓国人の入国者総数は1980年には約6万人，1981年には約10万人，1982年には約13万人，1987年には約15万人，1988年には約27万人，1989年には約52万人，1990年には約67万人ということであり，統計から見ても1989年の増加数は著しい［宮下 2005: 83］。

傾向を分析している。本事例のスニムもまさしくその例であり，生野区に住みながら，韓国人経営者のヘップサンダル工場に勤めていた。

猪飼野

在日コリアンの集住地域として，地理学の視点から猪飼野を分析している水内によると，その特徴は第一にほぼ戦災にあっていない場所であるということと，第二に戦前の土地区画整理地区で戦後も空閑地になっていた場所である［水内 2008: 269］ということである。生野区の集住を支えたのは，「1950 年代以降に興隆したヘップサンダル業であり，関連する産業の集積とともに雇用の場が拡大し，移住が進んだのである」［水内 2008: 271］。その当時の猪飼野の風景を写真に収めた曺智鉉の『猪飼野―追憶の 1960 年代』［曺 2003］に寄せた丁章の詩を以下に引用する。

その地が　猪甘津（いかいのつ）と呼ばれていた古代にも
その川べりには　はらからたちが　聚落を築いていた

百済川から平野川へ　その川が　名を変えようとするその頃より
新たなはらからたちが　築いていった聚落　猪飼野

君が代丸が　猪飼野と済州島を　結んでいた時代
玄界灘の荒波に揺れる　船内でのひしめきそのままに
寄り集まったはらからたちが　営んできた聚落にて
誰もが　より多くのものを手に入れ
そしてすべてを　喪失した
猪飼野は　沈黙の坩堝でもあり　　四・三の沈黙　　密航者の沈黙
暗殺者の沈黙　　革命家の沈黙　　沈む沈む沈黙　　半世紀の沈黙
猪飼野の沈黙は　分断の歴史そのものである

埋められた沈黙を土台にして　築かれていった聚落の風景
老婆の号泣　　男どもの怒号　　子を背負う女たち
太い指　荒れた手　へし曲った腰　路地裏の　ゴム屑と　豆もやしの樽
風呂敷商売（ポッタリジャンサ）　廃品回収のリヤカー　キムチ　豚足
いしもちの干物　気品高きチマ・チョゴリ　ゆらゆら浮かぶ川の小舟
橋の交番　商店街に掲げられた横断幕のスローガン　人々のいがみ合い
それでも女たちの笑顔と男たちの笑顔と　そして子供たちの
笑顔　笑顔　笑顔

その猪飼野が　猪飼野でなくなってしまって　もう久しい
地図から消えたその地を　この世から失うまいとして
はらからたちはうたい　はらからたちはえがき　はらからたちは物語り
はらからたちは撮った
あんまりな喪失感と沈黙までをも　失うまいとして

猪飼野でない　イカイノで　とめどなく　噴き上がる　火山島の　マグマ
イカイノさえもが　あわや消滅しかねないこのとき
郷愁ではなく　記録でもなく　ましてやコリアタウンでもない
はらからたちのその地が　神話として　今よみがえろうとしている

上記の詩は，丁章の「神話の地 曺智鉉写真集『猪飼野』に寄せて」［丁 2003: 54-56］である。写真集「猪飼野」のサブタイトルは，「追憶の 1960 年代」ということだが，モノクロの写真に写し出されている世界は，まさしくコリアンたちの生活誌であり，上記の詩はその実態を活字化し，そこで生きている，生きていこうとする者の言葉を代弁しているかのように見える。かつての「猪飼野」はその名も消え，コリアンたちの世代交代が進む現在のその地に一歩足を踏み入れた時，そこは単なる郷愁としての空間ではなく，新旧コリアンたちが混ざり合って、今日を生きている。上記の詩は，そのようなコリアンたちの強さ、したたかさを生きるバネとして描いている。

IV 宗教活動と現在

1　修験道の修行とＳ寺設立

当時のスニムの 2 番目の兄は，拝み屋さんをやるようになって 4 年ぐらいたっていた。中学を中退した兄はいろんな職業を経て，47,8 歳の時に見よう見まねで拝み屋さんをやるようになった。スニムは高校のときからカトリック信徒であったが，「宗教は人の和を基本にする。和を乱すと宗教の基本がなくなる」という兄の言葉で，次第に仏教に傾いていった。兄は 53 歳の時、心筋梗塞で亡くなるが，まだ息があるときに「般若心経をあげてくれ」とスニムに頼んだという。その頃のスニムはヘップサンダル工場に勤めながら，同時に整体の学校に行き、大正区にある病院の整形外科リハビリテーション科に半年ほど勤務していた。兄の死後，ヘップ産業の仕事はやめ，整体の仕事を本格的に 1 年ぐらいしたころ（38 歳），客に修験道の山伏の先生《八尾市山本の T 先生》を紹介される。そして，その後 3 年のうち，今度は 1 番上の兄が 60 歳前後に脳出血で亡くなる。なぜ，次々にきょうだいが亡くなるのか，思案にくれるうちに，

スニムはその救いを求めるように修験道へと傾倒していったという。毎月1回，護摩焚きに参加し，1年後（1993年）天台宗金峰山（きんぷせん）修験本宗総本山で得度を受け，「真晃」という法名を授かる。特に，奥駈（おくがけ）修行は難行で，吉野山から大峯山に登って，自然の木や岩盤の神々に祈って朝晩歩く。全行は8泊9日だが，男性は前期行4泊5日でもよく，女性は後期行の参加だけでも良い。スニムはその修行中，次兄の死は儀礼の作法も知らずに，見よう見まねで執り行っていたことから罰を受けたのではないかと思うようになったという。

しかし，同年，済州島の母が急病になり，1年間本国に戻った。1995年，観光ビザ（15～90日間）で再び，今里に拠点を置き，整体の仕事をしながら，本山の行に参加するという「行ったり来たり」の生活が2001年まで続く[9]。その間，済州島でも「施術院」，「心身健康研究院」を開設し，「心身健康ガイド」という心の問題，仏教に従った教え，民間療法等を掲載した月刊誌を刊行する。また，現代経済新聞社済州島支社長を2年くらい務める。

2001年2月（旧正月前）に本山の行事で日本にきた時に，宗教ビザがとれ，1年の滞在が可能になった。それを機に，仕事の上で日本に拠点を移す決心をする。しかし，家族は済州島に残っているので，2か月に1回は帰っている（1回の帰国で1週間，あるいは2泊3日）。そして，同年，総本山から寺の設立許可をもらい，ヘップサンダル時代の同僚の息子Jさん（日本人、2008年現在39歳）を助手にしてS寺を構えた。2002年（母が死亡）から3年のビザの延長が認められ，2007年には新たに近くの土地を購入し，新しい寺を建てた。主な理由は，商店街の中での寺の活動は，買い物客の人通りの邪魔になる，場所が狭い，信者の葬式が出せないということからである。ここで注目すべきことは，旧S寺のときは助手として，新S寺のときは副住職として日本人を協力者として取り込んでいる点である。日本人をパートナーとして取り込むことによって，韓国と日本の作法ができると考えていて，この点が先述したニューカマーの宗教的職能者たちとの決定的な戦略の違いである。また，在日の場合，シャーマンのような宗教的職能者たちに一世がだまされてきているのを家族たちは見ているから，二世，三世は「拝む」ということを信用していない。だから，スニムはすぐに「拝め」とは言わないという。整体のときの20人～30人の顧客から口コミで少しずつ広がり，数年をかけて信者を獲得していった。新しい寺の1階では助手のJさんの母親であり，ヘップサンダル時代の同僚であったTさんに喫茶店の経営を手伝ってもらっている。

2　福祉と国際交流

スニムは布教と同時に信者たちとの交流を通して，特に老人たちが置かれている現在の福祉や国際交流活動に関心を持つようになった。そのスニムの動向を以下のようにまとめた。

9）当時の今里のワンルームマンションの家賃は月53,000円で，年間に3回日本に来ていた。

2005年　韓国デジタル大学社会福祉学科に編入（高麗大学内），2007年修了。

同年　NPO法人国際友好促進会設立。理事長は副住職Hさん，理事は信者，知人。文化を介した民間交流の活発化を目指す。

2006年　よさこい，インド舞踊の日本人芸能団の公演会主催。

2007年　国楽協会済州島支会75名が大阪国際交流センターで，済州島の伝統民謡公演会。

同年　某大学大学院人間福祉人文社会学科修士課程入学，修士論文のテーマは「高齢者福祉サービスの一考察—大阪市生野区における通所介護サービス利用者実態調査をふまえて（仮題）」。

2008年　大阪国際交流センターにおいて李春羲海外特別公演，京畿民謡後援。

今後の課題は，仏教抜苦与楽の理念から，貧困，高齢，国籍という社会福祉のシステムから排除される人の役に立つために，①本堂のスペースを活かして，在日・日本人を含めた高齢者の憩いの場を作る。②在日・日本の老人ホームを斡旋，あるいは設立するということを考えているという。また，「これから先，何がしたいのか」という筆者の問いに，「NPO活動に力を入れていきたい」と答えた。

スニムの妻は済州島に住み，子どもたちはそれぞれの活躍の場を韓国本土に求め，スニム自身は済州島と日本を「行ったり来たり」しながら，生野区鶴橋というコリアンの集住地域で自己実現のために，永住権[10]取得も視野に入れて，今現在，修士論文に取り組んでいる。

V 信者の語りから

1　Tさんの語り

Tさんは，2008年現在62歳の日本人女性で，スニムの助手の母親であり，スニムの元ヘップサンダル工場の同僚である。Tさんが30歳の時に次男が小学校に入学し，結婚後初めて仕事をするようになった。新聞チラシで生野区北巽のヘップサンダル工場の従業員募集があり，そこで15年くらい勤める。革や合皮の靴を扱っていた。スニムは1988年から1年くらい同じ工場で働き，その工場をやめた3年後に工場は閉鎖になる。助手であるJさんが21歳の時である。その後、Tさんとスニムとの付き合いはなかったが，工場が閉鎖された3年後にスニムのお兄さん（拝み屋をやっていた次兄）のところに子どものことで相談にいった時に偶然再会した。Tさんは，1995年から2006年まで猪飼野の別のヘップサンダル工場に勤めたが，その間，長男

10)永住権の資格は以下のようである。①日本に10年以上居住。日本の法令に違反していない。②安定生活。③納税…国民健康保険，市民税，府民税，国税，介護保険，第二被保険者。

が23歳から8年間勤めていた板金会社が倒産した。Tさんは仕事もなく，途方に暮れていたJさんをスニムに紹介し，生野区鶴橋の朝鮮市場の中の廃屋を借りて寺を設立したかったスニムは，もう一人のコリアンの大工とJさんと3人で，廃屋を寺に造り替えた。元病院だった廃屋は10年間放置されていて，そこから出されたゴミや廃材はトラックで10往復分あったという。寺の立て替えの手伝いは2001年末までと聞いていたJさんだったが，スニムが韓国（済州島）に戻って半年間は日本に帰れないということで，今度は留守番を頼まれたということだ。その後、Jさんはスニムの助手となり，2003年には得度する。旧S寺の前の地蔵さんの祠（ほこら）は，スニム，Jさん，コリアンの大工で建てた。Tさんは，ヘップサンダル工場に勤めながらも，旧S寺の本堂の献花を絶やさないように仕事の帰りに立ち寄ったという。しかし，2003年に新たな信者Kさんが現れたことにより，献花はKさんが代わってするようになった。2007年に新S寺を建立した時，1階のスペースが空いたので，何かに使えないかということで，喫茶店を造ることになった。信者や地域住民がお茶を飲み、憩える場所ということで，喫茶店を造ることになったが，和歌山の寺にもそのような寺があるということだ。

Tさんは，信者ではないけれども，スニムの宗教者としての力を信じており，困った時には様々なことで助けてもらったという。Tさんの実家は千葉であったが，結婚して生野区巽に住むと周りは在日の人が多く，ヘップサンダル工場の社長も在日であった。スニムと一緒だった工場の従業員は，15人中Tさんだけが日本人であったという。従って、在日の人に対する違和感のようなものはなく，子どもたちの小学校では半数が帰化者を含めた在日が占めていたという。スニムが施す儀礼は主に，家祈祷（やぎとう）といって家内安全，引っ越し，新築，開店の時の神託である。また，葬儀も執り行うが，信者の場合，報酬は受け取らないという。また，Jさん以外にもスニムのもとで得度した日本人は2人おり，後述する副住職Hさんともう1人は30歳前の女性で，住ノ江で寺を開いているということだ。

2　Kさんの語り

Kさんは，2008年現在46歳の日本人女性で，副住職の娘である。S寺を知ったのは2002年で，夫の姉が自身の引っ越しを占ってもらうために近所のおばさんに教えてもらったことが縁で，KさんもS寺のことを知った。39歳の頃から更年期になり鬱の治療のため，病院へ通う途中に遇然，S寺の前を通っていたということだ。1年くらい鬱の投薬を受けていたが，S寺に通うようになり，「毎日寺に通い，御本尊さんに苦しみを聞いてもらいなさい。ためこまないように」と，スニムに言われ，それを実行していたら1か月もしないうちに，薬は必要ではなくなった。不眠だけが残った時も，夜眠れなければ，昼に寝ればいいと考えると気持ちが明るくなったという。スニムには仏に手を合わせる意味と作法を教えてもらった。つまり，自分はこうなりたいという気持ちがあって，心から仏の前でそれを願えば，必要な時にそれに出会え

る。タイミングの問題で，それに出会えれば素直に沿っていけばいいと言われたという。スニムに出会ってから，何かあったらすぐに相談するようになった。「大難を小難に，小難を無難に」というスニムの口癖がKさんの日常になったという。

Kさんの父親である副住職Hさんは昭和11年生まれの2008年現在72歳である。彼の父親が修験道の講員[11]であったが，当時は全く興味がなく，退職してから2003年にスニムのもとで得度する。2006年にKさんのいとこが肝硬変で危篤になり，亡くなった人にしか供養というものはできないのかをスニムに相談した。生きている者にもできるということであり，2006年2月に病者加持[12]をすると，奇跡的に2007年6月までいとこの寿命は延びた。その後Hさんは家に道場を開き，本堂を構え，2007年からは，新S寺の副住職にもなった。その後も病者加持をして，進行が遅れることは度々あった。しかし，子どもが引きこもり，子どもには接触しないで加持をしてほしいという親の依頼があったが，子ども本人が望まないとだめで，本人がよくなりたいと思う気持ちと一致しないといけないとKさんは言う。父親のHさんは，自分には力がなく，人を助けることはできないが，加持をきちんと誠心誠意，一生懸命やれば，人間と仏の仲立ちができるのではないかと思っているということだ。

3　Yさんの語り

Yさんは，1929年に済州島で生まれ，2008年現在79歳の在日コリアン一世の女性である。父親が14歳の時に君が代丸で大阪市谷町4丁目に来る。20歳の時，済州島に戻り同年齢の母と結婚する。Yさんは，父が21歳の時に生まれ，2歳の時に両親と谷町4丁目に来る。父が3歳の時に亡くなり，母は父の遺体を土葬するためにYさんを連れて，済州島に戻る。その後、Yさんの母親は済州島で再婚し，Yさんは母の兄が営む御幸森の乾物屋に預けられた。そこには母方の祖母がいて，Yさんをとてもかわいがったという。その後、早く嫁にいかないと挺身隊に引っ張られると言われ，17歳の時に親同士が決めた2歳上の夫と結婚した。その年に日本は敗戦。麦を買い出しに四国，名古屋へ行く。20歳の時に長女を妊娠し，結婚当時から4年間，夫のおじさんの長靴工場の二階に住んでいたが，夫の弟が済州島から来て一緒に住むことになり，猪飼野の他人の家の二階に部屋を借りた。

1949年当時は物資がない時代で，長女をおんぶして神戸に進駐軍の服の買い出しに行った。同郷のおじさんが着ぐるみで進駐軍の服を身に着け，それを売りさばくのを特別に分けてもらい，鶴橋の市場で売った。進駐軍の服は丈夫で暖かく評判が良かったそうだ。ズボン1本300円，ネックのセーター1枚500円の儲けがあった。Yさんが22歳の時に次女が生まれ，家を購

11)金峰山修験本宗総本山に所属しているグループの成員。講長は自営業やサラリーマンの人がなることが多い。大峯登山の時に講員が護摩を備え，講長が護摩を焚く。

12)病気の人に供養すること。

入した。その後，パチンコの景品買いも1年くらいやったが，たばこの配給制がなくなり，その次の景品がガムになったころにはやめたということだ。次女が1歳を過ぎた頃にミシン裁縫を始めた。服の卸屋から裁断した上下の服をもらい，それを縫い付け卸す。その卸屋は家を買う時に2万円を借りた同郷の人で，報酬から毎回2,000円ずつ引いてもらったという。その後，25歳（1954年）の時長男，30歳の時三女を産む。41歳の頃からポッタリジャンサを始め，ソウルからアンゴラを買ってきて，堺本町の問屋に売ったら，注文が500枚から1,000枚あり，3日に1回は南大門に仕入れに行ったということだ。

次女が2005年に肺がんになり，その後，脳に腫瘍ができる。その頃友だちに誘われて初めてS寺を訪れた。それまでは他の真言宗の仏教教団に入っていたが，S寺の祭壇に飾られていた亡くなった人の写真を見て，次女もここで供養してもらいたいと思うようになったという。2008年3月に次女が亡くなった。その間，Yさんはスニムとの付き合いの中で，良心的で欲がない人だと思ったそうだ。それ以降，法事や盆，正月はS寺で供養をしてもらっている。安く請け負ってくれるので，余分に支払っているという。法事の時は日本語と韓国語でお経をあげてくれる。それは日本での生活が長くなり，日本文化に慣れているし，日本の地に骨を埋めるのだからというスニムの考えだという。Yさんの夫の両親の位牌に魂を入れる時，スニムは泣いていたという。

4　考察

信者たちの語りから，スニムとの関係性がどのように構築されていったのかというと，儀礼を通して形成された両者の信頼関係というよりも，むしろ，それ以前の悩みの相談を介して心が癒されていくプロセスに筆者は注目した。信者である彼女たちは，それぞれが抱える悩みや苦しみを，スニムの前に吐き出し，それにスニムが何らかの解決の道を提示する。そのやり取りの中で，彼女たちは自ら救済の道を見つけ出しているという状況が語りの中から窺えた。そして，Tさんを含めた3人の信者たちが，一様に共通して言っているのは，拝みを強要したりしないし，寄付金の要求もないということだ。例えば，祭壇の前のろうそく1本は他の寺では1,000円だが，S寺は500円であり，信者であれば葬儀屋に支払う費用だけで，S寺への報酬は一切受け取らない。喫茶店の価格にしても安価であるし，お昼を過ぎてもモーニングをふるまったりしている。同様の宗教的職能者たちの儀礼への多額な報酬を経験している信者たちにとっては，スニムのような存在は希少価値であることは確かである。また，日本人の信者にとっては，コリアンのスニムが日本の修験道を極めており，尚且つお経に用いる言語が日本語であるということは少なからず親近感を持つ要因であると思われるし，在日の比較的古い世代にとっても，韓国の伝統的な作法を持つスニムに対しては，日本人同様に親近感を持つと考えられる。日本人，コリアンに拘わらず，人間が抱える生，老，病，死などの苦悩の解決が主眼であ

り，本事例のケースでは，ナショナリティ（国民性）は既に超克されている［宮下 2006: 229］。宗教や信仰を通して救済されることを希求している者がいる限り，それは再生し続けていくのである。

おわりに

先の論考でオールドカマー（定住コリアン）のシャーマンが，戦前の皇民化教育，戦後の差別（蔑視），国民統合のための融和政策という日本政府の対在日コリアン政策があったにも拘わらず，生活世界では，境界なき関係を通じて在日コリアンと日本人がそれぞれの文化を共有しながら，新たなシャーマニズムを創造していたと考察した［宮下 2005: 55-85］。しかし，オールドカマーたちには「ここ（日本社会）で生きていく」という覚悟があり，筆者がインタビューをしたニューカマーたちとは異なる点である。これは，1997年に調査したロサンゼルスの在米コリアンにも共通する点で，コリアン・アメリカンのKさんは，「私たちは韓国と日本とアメリカを行き来するけれども，基本的にアメリカで生きるしかないの。留学なんかで来るインテリたちと，まずそこが違う」と言っていたが，彼女の子どもたちは，ただ働くだけのKさんのような人生を否定し，生きることをもっと楽しみたいと言っていた。つまり，生きていくうえで世代間の価値観の違いというのは避けがたく，はじめに述べたように，従来の「移民」とは異なり，今日の「移民」は，本国と受け入れ国にまたがるネットワーク・活動・生活パターン・思想を展開していて，地理的・文化的・政治的境界を越えた社会フィールドを構築しているのである。

先述の図1のように，ニューカマー以前の済州島の人々が，日本に多数流入してきたおおまかな背景には，戦前の尼崎汽船の阪済間往復航路開始，1948年の四・三事件，1950年の朝鮮戦争があった。特に，1910年代の日本の植民地支配による生活の経済的不安や，日本側の低賃金労働力需要の拡大に伴い，済州島の多くの人々が職工として大阪へと渡航して行った。同時に，彼らは同郷人のネットワークを利用して，連鎖移民として一定地域に集住する特徴を持つ。しかし，本事例のスニムは，1988年に渡日してきたニューカマーであり，「これからも日本に住むかどうか分からない」のである。済州島と大阪を「行ったり来たり」しながら，宗教活動を中心に日・韓の文化交流を促進し，将来は社会福祉の活動に力を注ぎたいと考えている。スニムのようなニューカマーのトランスナショナルな生きざまは，時代とともに変化した日・韓のトランスナショナルな状況を体現するものであり，日本社会において境界を越えたそのスニムの志向性に価値を見出した者が，日本人，韓国人にかかわらず，信者となっていくのである。

参 考 文 献

〔日本語〕

伊地知紀子

2000 『世界の創造と実践——韓国・済州島の生活誌から』東京: 御茶の水書房.

佐々木宏幹

1980 『シャーマニズム』東京: 中公新書.

杉原達

1998 『越境する民——近代大阪の朝鮮人史研究』東京: 新幹社.

谷富夫

1985 「朝鮮寺——在日韓国・朝鮮人の巫俗と信仰 1 朝鮮寺と巫俗」『生駒の神々——現代都市の民俗宗教』宗教社会学の会（編），236-258 ページ，大阪: 創元社.

曺智鉉

2003 『猪飼野——追憶の 1960 年代』東京: 新幹社.

丁章

2003 「神話の地——曺智鉉写真集『猪飼野』に寄せて」『曺智鉉写真集 猪飼野——追憶の 1960 年代』曺智鉉他（著），54-56 ページ，東京: 新幹社.

つかこうへい

1990 『娘に語る祖国』東京: 光文社.

原尻英樹

1994 「大阪生野在住日系人の人権意識」『済州島』7: 40-48.

2000 『コリアンタウンの民族誌』東京: ちくま新書.

水内俊雄・加藤政洋・大城直樹

2008 『モダン都市の系譜——地図から読み解く社会と空間』京都: ナカニシア出版.

宮下良子

2000 「在米コリアンのエスニシティに関する一考察」『九州人類学会報』26・27 合併号: 11-24.

2005 「越境するシャーマニズム」『韓国朝鮮の文化と社会』4: 55-85.

2006 「民俗知の生成——在日コリアンのシャーマニズムの事例から」『白山人類学』9: 213-231.

文京洙

2008 『済州島四・三事件——「島（タムナ）のくに」の死と再生の物語』東京: 平凡社.

〔英語〕

Basch, Linda, Nina Glick Schiller and Cristina Szanton Blanc

1992 *Nations Unbound: Transnational Projects Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States*, Langhorne: Gorden and Breach Publishers.